



生成文法理論： その総括と課題

— 訳書『チョムスキーの言語理論』(2019)を踏まえて —

| 日時 |

2019. 9.28 [Sat] ~ 29 [Sun]

13:00 - 18:30

参加費無料・申込不要

※会場座席定員の200名を超えた場合は、入場をお断りさせて頂く場合がございます。

| 会場 | 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール

| 主催 | 慶應義塾大学言語文化研究所



生成文法理論の誕生から60年以上の歳月が流れ、この理論もおおきく変化、成長した。この間、この理論に関する概説書やチョムスキー論の類も数多く出版されたが、そのなかでも、Neil Smith and Nick Allott, *CHOMSKY: Ideas and Ideals* (third edition, C.U.P. 2016) は、チョムスキー理論の本質を浮き彫りにし、彼の多岐に渡る思考を味わい尽くした名著といえる。2019年2月、同書の(政治論の章を除く)訳書『チョムスキーの言語理論—その出発点から最新理論まで』(今井邦彦、外池滋生、中島平三、西山佑司訳、新曜社)が刊行された。これを機会に、訳者4名は、本書の重要な部分および、controversialな部分を取りあげ、それらについて、参加者と議論を深めていきたいと考える。1日目に各章の主張の要点を述べ、2日目に各訳者による見解や問題点を提起することによって、この60年間のチョムスキー理論を総括するとともに、今後の展望および課題を論じる予定である。

[お問い合わせ先]

〒108-8345

港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所

Tel: 03-5427-1595 (事務室直通)

<http://www.icl.keio.ac.jp>

mail: genbu@icl.keio.ac.jp

1 今井 邦彦 氏 (東京都立大学名誉教授)

「言語は頭脳の外部にあるのか内部にあるのか」

“言語”と聞くと多くの人は「自分の頭の外にある習慣・しきたり」と捉えがちだ。これに対するチョムスキーの「言語内在説」の特質を明らかにし、avocat du diable として生成文法批判を試みる。

2 外池 滋生 氏 (ハワイ大学客員研究員)

「概念的必然性はどこまで達成されたか」

チョムスキーの言語理論は2008年で1つの到達点に達したが、その後2013年、2015年でラベル理論という新たな展開があった。これらの成果を整理し、今後の課題を概念的必然性の観点から検討する。

3 中島 平三 氏 (東京都立大学名誉教授)

「チョムスキー理論と心理学：
獲得、病理、さらに教育」

言語獲得や言語処理、特殊な状況下における機能分離などの心理学的テーマと言語理論との双方向の関係や影響を検討し、さらにチョムスキー理論に基づく教育論についても考える。

4 西山 佑司 氏 (慶應義塾大学名誉教授・ 明海大学名誉教授)

「チョムスキー理論と哲学：
方法論的自然主義と内在主義」

なぜ現代哲学者はチョムスキー理論に納得しないのか、言葉と世界の関係やコミュニケーションの問題はなぜ理論言語学の射程に入らないのか、チョムスキーの考える「言葉の意味」とは何か、といった問題を検討する。